

# 火星

平成二十五年十月号



七曜抄  
(八)

山尾玉藻

車座を鼎座を小鳥渡りけり

水の面へのぶ種採の母の影

次の世もその次の世も冬瓜たり

ふんだんに水あれば飛ぶ草の絮

菱舟が小雨の沼を押しゐたり  
書留で来し子規庵の花の種  
大花野チンギスハンの影追へり  
菘括る紐探しゐる家の闇  
月白の水へだて歩を合はせをり  
箒目の道門へ入る秋の暮

# 太白星

梅雨明くる天保山の登山証  
滝への径しばらく水を離れけり  
片蔭の途切れし道を迷ひけり  
町ごとに祭蔵あり夕焼雲  
月涼し甕にあしたの水満たす  
兜煮の鯛の目玉の涼しさよ  
眼鏡屋のレンズ水いろ水中花

杉浦典子

浜口高子

す  
と  
ん  
と  
晴  
間  
花  
柚  
子  
の  
匂  
ひ  
け  
り  
  
絵  
画  
展  
隅  
に  
晩  
夏  
の  
椅  
子  
一  
つ  
  
海  
の  
日  
の  
洗  
ひ  
ざ  
ら  
し  
の  
波  
頭  
  
う  
な  
ぎ  
屋  
の  
暖  
簾  
を  
分  
け  
し  
洗  
ひ  
髪  
  
松  
葉  
降  
る  
奥  
の  
明  
る  
き  
星  
迎  
  
篁  
の  
朽  
ち  
ゆ  
く  
も  
の  
に  
月  
の  
影  
  
銀  
河  
濃  
し  
山  
頂  
に  
湯  
を  
あ  
ふ  
ら  
し  
め

# 火星作品

山尾玉藻選

ひと雨のありし花莫蔭父居らず  
宝塚山田美恵子

抱かれに來し子の水蜜桃の息

潮騒とかかはりゐたる走馬灯

夕焼に灯ともし屋台支度かな

地を叩く雨のまつ白泥鱒鍋

波しぶき立つ舟だまり祭來る  
小林成子

ゆふかぜのささげの丈や祭笛

ビルの間に雲の湧きぬる宵宮かな

青萩の朝日こぼるる城址かな

コンコースの天井たかき夏休

七月の月より落つる瀧の音  
大和郡山城 孝子

吾に剪る七夕笹や朝日射す

水打つて蟬の木覺ます夕べかな

塵とりの蟬鳴きにけり東大寺  
打水に猫のとび出す花街かな  
捕虫網禾を払うてゆきにけり  
夕食のあと夕暮瓜の花  
をちこちに実梅のこぼれ町古りぬ  
宝塔の影のまさしく夏の月  
月明の岩になめくち生まれけり  
香具師たちの軍手に梅雨の明けにけり  
城山のかんかん照りを捕虫網  
笹山の根のゆきわたる大暑かな  
星の降る水べり歩む帰省かな  
小鳥ほど病み炎帝を畏れけり  
海女小屋の山がかりなる濯ぎもの  
大佛に継ぎ接ぎあまたあり涼し  
金魚田の畔のポンポンドリアかな  
盆波や夜干しの海女の脇白し  
三伏の鯉の叶きたる鱗かな

神  
戸  
深  
澤  
鱻

宝  
塚  
蘭  
定  
かず  
子

吹  
田  
田  
中  
文  
治

# 選のあとに 山尾 玉藻

抱かれに來し子に水蜜桃の息 山田美恵子

幼子が両手をあげて抱っこをせがんだ時、その息に水蜜桃の甘い香がした。何と愛おしいことか。水蜜桃の香はアガペーの風景。

ゆふかぜのささげの丈や祭笛 小林 成子

単純な景だが、夕風に揺れる豇豆は安寧の象徴であり、遠く聞こえる祭笛の距離感が作者の心象風景をほどよく伝えている。

吾に勢る七夕笹や朝日射す 城 孝子

強い精神力で大病を凌がれた作者であるが、真のこころの安泰を得られるにはまだまだ時間がかるだろう。「朝日射す」は写生、そしてひたすらな感情移入。

夕食のあとの夕暮瓜の花 田中 文治

夕食を終えると滞りなく夕暮がやってきた。恙なき時の流れに身を置く安泰に、「瓜の花」の斡旋はまことに適切且つ絶妙。

笹山に根のゆきわたる大暑かな 蘭定かず子

この写生にも静かな感情移入があり、この観照の確かさが

「大暑」に大きな説得力を生んだ。

海女小屋の山がかりなる濯ぎもの 深澤 鱻

「山がかりなる濯ぎもの」はごく自然体、しかしこの何でもないコンパクトな景にこころ惹かれる。ものを投げ出した作りは俳句の骨法、多くを話しかける。したがって強い。

疲れ鶉のはばたいて砂利鳴らしけり 山本 耀子

疲れ切った鶉の足が砂利を鳴らし、虚しい音を立てた。その音はかりそめの音、鶉飼の哀れさを象徴する音。

住み古りて小声がちなる葎簀かな 坂口夫佐子

「小声がちなる」に実体があり、草臥れ始めた葎簀との存間に人の世の情が見え隠れする。

遠雷やおからの玉にぬくみあり 大山 文子

おからに残るぬくみは些末そのもの、しかしそれがなにか由々しい世界を予兆させる。「遠雷」がほどよく効いている所以。

よこたへて部屋いつばいの笹かざり 安積 亮子

切り出した七夕笹を部屋に寝かせた時の素直な驚きが良い。短冊や飾りが部屋中を彩り、初々しい喜びがたちもどつてくる。

(以下略)



# 恒星圈

加古みちよ

名水の名水たりし砂糖水  
父母に明治の世あり砂糖水  
復活の心ふつつ砂糖糖水  
筋トレの二日続かず暑氣中り  
みづすまし静かな刻を忙しく

長田曄子

河崎尚子

どくだみを束ねし母のせしやうに  
かがむ背のさびしかりけり燕子花  
仰がるるところに盛る百日紅  
明易やいたはるやうに犬の舌  
白さぎの翔つ濠端の割烹店

搔きこんで子が箸置けり紅蜀葵  
母の肩甘噛みしをり昼寢覚  
学祭のチラシ流るる晩夏光  
焼そばの匂ひの浴衣帰り来し  
子子の踊りを流す手の白さ

垣岡瑛子

小林成子

水無月の泥くねりくる鯉の背  
二本立て観し片蔭を帰りきし  
ゆづられし座席のぬくみソーダ水  
潮風の抜け道のびわ密々と  
湿りぬし寄贈の蔵書のうぜん花

祭待つ舟しづかなる幣の揺れ  
笹箒束ね宵宮の川辺ゆく  
公園の蛇口上向く晩夏かな  
スタジオに桔梗挿せるアナウンス  
夕かなかな駅のむかふに用ひとつ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

田中文治

満願の杖を泉に浸しけり  
大西日車道を隔て呼び合へる  
水打てるインドカレー店の主  
石佛に風生る水打ちにけり

涼野海音

六月の風つかみたる赤子の手  
出水川に沿うて歩める犬二匹  
虻飛んで石の狐の耳暗し  
野球部の監督が剥くバナナかな

藤田素子

早梅雨ひと駅間を目睨れり  
炎昼の車両にハリポッターの絵  
こむづかしき貌の揃ひし扇風機  
夜の蠅四角き部屋を丸く飛ぶ

井上淳子

経本の手擦れのしるし夏の雨  
読経なか百合のしづかに開ききし  
寝違ひの首まはしけり雲の峰  
高下駄が生簀をのぞく夜の緑

西村節子

顔近く脈とる女医や梅雨湿り  
金魚田の方を指したる扇子かな  
二上山へしさりしさりて田草取  
毗を蜥蜴走りし高野道

林範昭

今朝秋の盥にこまんじやこの光  
内濠をひとまはりする夏期講座  
八月の気愈く垂るる柿暖簾  
凌霄の往き交ふ人に咲いてをり

西畑敦子

鉾立を見上げてをりし常着の妓  
灯の入りて衿ゆるやかに鉾の町  
紅筆をひとつ買ひけり祭笛  
蓮池を真二つにして一両車